

松嶋日記の絵

中西 健 治

はじめに

枕冊子研究の、とりわけ清少納言伝研究のなかでときどき触れられる作品として松嶋日記という作品がある。もちろん清少納言の作ではなく、作中に清女に擬せられた老いた尼がはるばる松嶋にまで旅をするという旅日記形式の小さな作品ではある。そのため従来からこれを正面からとりあげる研究は少なかつたのであるが、東北大学日本文化研究所の研究報告に二集に互つて掲載された論考は本文の翻刻、語句の注釈、作品の解題におよぶ詳細なものであつて、研究史上画期的な業績と高く評価しなければならぬだろう。稿者も勤務校の図書館に設置されている特殊文庫の一つ、春曙文庫（故田中重太郎博士の御蒐集にかかるとして設けられた文庫）にも七本の写本があることから、この作品に関心をもち続けていて、管見に及んだ約四十本ほどの写本をもとに校本めいた手控えを作成していた。その作成途上で、失書

・墨書による多くの頭注・傍注やさまざまなかたちの奥書などにも興味ある記述があるように思われ、機会をみて公表する準備をすすめている。本稿では、その一部をなす絵について調べ得たことを要点のみあらあらと述べてみたい。

—

松嶋日記の多くの写本（翻刻された本を含む）のうちの多くに頭注、傍注がみられる。本文の傍らに適当な漢字を宛てるもの、「おほしいつるたになき世に」の箇所「古語云去者日疎」と読解に幅を持たせる注、「台盤所」の説明として禁秘抄を引用する注や、「あきたた（顕忠）」について系図を付すもの、さらには引歌の指摘等々、様々なかたちの注が書き入れてある。そのなかの注意される注の一つに、末尾語句（「・・・所」）の共通した十箇所の注がある。示せば次のとおり。

A イ本二甲賀「甲斐」のこほり此所に 内裏屋敷を後に見て尼

の旅たちゆく所の絵入と云

B かきつはたなく八橋はかり河のほとりに雪をれ「冬かれ」の柳かきて尼のよむ所

C 「イニ」くちにたるにノ下かたへの間ニ うつの山にてみの笠着たる尼岩にこしかけて居る所

D 房にト来りノ間ニ ひしりの房の松の前に老たる男女集りたる所かたはらに翁の酒のむ所

E イニいへともト行きの間ニ あしから山の麓の里家やけあかりたる所

F 「イニ」やうにしてトのほるノ間ニ 山かつおほく尼を負て足から山をのほる所

G 「イニ」歌トと心に「念しつゝ」の間ニ しら川の関にて関守尼にかれいゐあたふる所

H くらしたりの下ト下ノ巻の間ニ 松嶋のうらの景かきて房のかたはらに片庇の庵に尼のすむ所

I 「イニ」住トつきてトノ間ニ 嶋の草庵にて尼ふたりあふてなく所

J 「イニ」あたにト立ゆくノ間ニ 草庵にて尼ひとり仏の前にて経よむ所

このような注をもっている本はあまり多くの本にあるのではなく、わずかに七本（春曙文庫蔵五〇八本、同五〇七本、斎藤報恩会蔵本、中田光子氏蔵本、柿谷雄三氏蔵甲本、神宮文庫蔵本、東北大

学付属図書館蔵本）に過ぎない。これらの意味するところは、その本文の内容から推察できるように、またAのやや他と異なつた末尾文にその片鱗が示されているように、該当箇所を描かれていたであろう絵とその箇所と図柄とを説明しているものである。そしていかにも、そのような絵が現実存在するのである。その一本こそ東北大学付属図書館蔵本（以下、東北大本と略称）であつて、前掲の研究報告では、「本写本には墨絵が十図（一図は半丁）挿入されている。それらの箇所を料紙番号で示せば、第四・七・九・一二・一四の各丁である」と、ごく簡略に触れられ、「付記」の後にその十図が縮小して掲げられている。それらはAとJの各説明文に合致していること、もちろんのこと、その点でもまことに有益な御報告であつた。ただ惜しむらくは、これらの絵についてのことは、後日の課題であるとお考えになつてか、あまり注意しておられず、うち置かれたままにされている感がしてならないのであつた。というのも、これらの絵は（本文も）柿谷雄三氏蔵甲本（以下、柿谷甲本と略称）とほぼ完全に一致していることから、考察すべき問題点がありそうに思えてきたからであつた。たとえば、本文の書体は相違してはいるものの、絵柄はいずれかが模写もしくは透き写しをしたのではないかと思しきほど似通っていることは一目瞭然で、驚嘆せざるを得ぬことであつた。その例を示す。（図一参照）

但し、両本の描き方の微細な点では柿谷甲本の方がより綿密な筆使いが感じられ、全くの透き写しではないこともわかる。これも

例を掲げておこう。(図Ⅱ参照)

このことからいささかの考察をすることもできようが、論点を絞って述べておきたいので、いまは措いておく。

二

ところで、松嶋日記の研究史をたどるとき、このような絵について、かつて田中重太郎博士が「絵と枕冊子絵巻と清少納言」という論文⁽⁶⁾のなかで、神宮文庫本を調査して次のように述べておられることがあつた。少し長いが引用しておく。

ここまで書いて来てしばらく稿をあためていたわたくしは、清水泰教授に会い、談たまたま松嶋日記の絵のことにおよんだ。清水教授は、「だいぶん以前だが、絵のはいつたものを見ましたよ。神宮文庫で。粗末な墨絵でしたが」といわれる。早速神宮文庫に照会し、リコピーをおねがひした。その結果、同文庫に二部⁽⁷⁾の松嶋日記があるが、林崎文庫本のそれには、架蔵の本とおなじ十箇所⁽⁸⁾の絵図の説明があり、しかも、それには清水教授のいわれるように架蔵の本には見えない墨絵が八図(一図は一丁にわたる)描かれていることがわかった。しかも、その筆者は、この書第二十四丁裏に見える左の文により忍鑑という僧であつて、その原拠本にはやはり絵がなかつたこと、この写本が享保四年(一七一九)秋のものであることなどを知つた。

松嶋日記の絵

右清女松嶋日記異本勘校之書者奥田氏秘蔵之

者なり享保第四亥秋菊月上の七日請求て書写之

画図者写本になしといへとも首書の心をもてみつから

図する所なり後人往古之正図を以て考合修補して

好古之志をつかは幸不少云爾

洛下隠士台宗沙門忍鑑南空花菴に寓して念

誦のいとま書之

かくて絵入の松嶋日記はあつたが、依然として土佐光俊の描くという清少納言絵はないようである。これらは中世人のそらごとであつたのであろうか。はたして、現在松嶋日記は清少納言絵詞であつたであろうか。

ともあれ、清少納言絵詞といわれる松嶋日記の絵入り本の紹介がはじめてここにできたことは、まことにうれしいことである。その存在をお教えくださった清水教授ならびに複写の労をおとりくださった神宮文庫の古川氏にあつく御礼申しあげる次第である。

これをもとに、稿者も神宮文庫に赴き、文庫主事の黒川典雄氏の御教示によつて同文庫に所蔵されている四本すべてを閲覽することができた。そのことで、田中博士の報告された本が「清女松嶋筆記」(八一八七二)と題簽の付されたものであること、また「墨絵が八図(一図は一丁にわたる)」と記されているところは「墨絵は十三図(一丁が一図、一丁半の図が一図、その他は半丁)」と改めておくのがいいのではないかということなどもわか

った。

いま当面の課題である絵について三本（神宮文庫本、柿谷甲本、東北大本）を対照させてみると次のようになる。

巻	神宮文庫本	柿谷甲本・東北大本
上	山々の光景（三才）	ナシ
	A（三ウ・四オ・四ウ）	A（三オ）
	波打ち際の松、遠くの山々	ナシ
中	B（七ウ・八オ）	B（三ウ）
	松と遠い山、麓に邸宅	ナシ
	C（十一オ）	C（六オ）
	D（十一ウ）	D（六ウ）
	E（十三オ）	E（八オ）
	F（十三ウ）	F（八ウ）
下	G（十六オ）	G（十一オ）
	H（十六ウ）	H（十一ウ）
	I（二十オ）	I（十三オ）
	J（二十ウ）	J（十三ウ）

柿谷甲本、東北大本がすべて半丁に絵を収めているのに対し、神宮文庫本は一丁、一丁半にわたるゆつたりとした絵柄になっている。その典型的なのがBである。（図Ⅲ参照）

また、柿谷甲本、東北大本に無くて神宮文庫本にある絵は三図あ

るが、その絵柄はいずれも風景を描いているという共通点がある。（図Ⅳ参照）

もちろん三本すべての絵からも基本的に言えることではあるが、繰り返し風景画をもつ神宮文庫本からはとくに、歌枕を尋ねながらの旅を描く松嶋日記にはそぞろ絵心を誘う要素があったのではと思わせるものがある。しかも、A、Bのゆつたりとした風景を描く絵は丁の裏から描きはじめている。このことは柿谷甲本、東北大本がすべて半丁に整理したようになっていいることと比較させてみると、注意していいことになるのではないか。仮に三本が共通祖本によつていたならば、神宮文庫本も整理した絵柄を採つたかも知れないし、他本に見られない絵のことも注記されたであろう。手許の校本によつても、三本は本文上からは同じ系統にあることを考えあわせると、神宮文庫本は他の二本と何らの交渉もなかったはずとみてよい。そもそもひとつの絵を描くにあたって、丁の裏から始め次の丁に亙るという手法自体が冊子形式の本に馴染まないのではなからうか。物理的に冊子形式を無視したところにあった、例えていうならば絵巻のような形式を神宮文庫本は伝えているように思えてならないのである。

三

松嶋日記の写本の多くには奥書、識語がある。その多様な相については別稿に譲ることとして、大部分の本には、次のような奥

書がある。いま東北大本の本文を記す。

右之巻松嶋日記絵図者土佐光俊蒙

仁治皇帝之勅製之今借 道朝親王之御本写之畢

「右之巻」は「右三巻之日記」とする本が多い。この奥書を見るかぎりにおいては、三巻の松嶋日記は土佐派の画家の手によつて勅命を蒙つて作られたものであつて、いかにも由緒正しい作品として伝来したと思われる。稲賀敏二氏はここに記されている三人について各々次のように注されている。

「光俊」土佐宗家の画人光時に準じていうか。

「仁治皇帝」仁治の年号は一二四〇―一四三。四条天皇の御代「道朝親王」後円融天皇の第二皇子の道朝法親王か。文安三（一四四六）年二月没、六十九歳。

また稲賀氏は種々の奥書を検討されて、「これらの奥書のうち、『寛正三年（一四六二）』とあること、また道朝法親王の本を写したという記述との関連で、この日記の成立は、早くとも室町初期あたりであろうか。」と述べておられる。これらのことから憶測するならば、松嶋日記三巻本は道朝親王本から何代かの転写を経るうち、本来は共にあつた絵と詞とがそれぞれ独立し、また書物の形態の変化とも相俟つて、冊子本が詞のみを伝来していき、絵はうち置かれたままになつていったものではあるまいか。柿谷甲本、東北大本、神宮文庫本の三本はその点で松嶋日記の古態を留めている本であり、とりわけ神宮文庫本は絵巻として伝えられて

松嶋日記の絵

いたことをも推測させるきわめて貴重な本でもあつたのである。もつとも、前節で田中博士が奥書を引いて説明されているように、これらの本は絵の無い写本をうけて忍鏡という僧が「首書の心をもてみつから図する」ものであつたことから、必ずしも原形態を継承しているものとは言い難い。「首書の心云々」とは現存本の数本にある絵柄を説明する文言のことを指しているよう。忍鏡はまた、「後人往古之正図を以て考合修補して云々」と謙遜して述べている。したがつてこれらをすべて文言通りに受け取つていいかは慎重でなければならぬ。「みつから図する」とは言い条、拠るべきなものも無かつたのだろうか。何よりも、三本が同じ忍鏡の手になると言いながら、神宮文庫本には他の二本に無い風景画があつたり、同じ絵の構成でありながら一方は「こじんまりと、他方はゆつたりと描かれている」という事実から、奥書それ自体を割り引いて眺めざるを得ないからである。

おわりに

「近世の知識人が本書を珍書として重んじていた」といわれる松嶋日記は、正面に据えて論じられることがこれまであまりなかつた。もちろんそれなりの理由あつたことではあるうけれども、枕冊子、あるいは清少納言伝研究の大きな展開のなかに、ごくたまに、しかもほんの数行しか言及されないのも、不自然と言えなくはない。写本群を逍遙しつつ、そこに記された本文の全体を大

大きくとらえてみる必要を感じ、種々の観点から論じるところでもできるのではないかと考え、その一部について基礎的な考察を試みた。言い足りない点も多いが後日の課題としておきたい。

註

- (1) 鈴木則郎・呉羽長両氏「東北大学付属図書館所蔵『松嶋日記』翻刻と注釈」(『日本文化研究所研究報告』別巻第十八集・昭五十六・三)、「『松嶋日記』考―その成立と清少納言の晩年―」(『同報告』第二十集・昭五十八・三)
- (2) 春曙文庫所蔵の松嶋日記は『春曙文庫目録(和装本編)』に掲載の六本(請求番号、春五〇七、春五二二)と別にもう一本がある。なお、春五〇八は田中重太郎博士が『国文学』第九卷第一号(昭三九・一)に翻刻紹介されている。
- (3) 一は主要な異文を表わす。
- (4) (1)に同じ。第十八集に絵が掲載されている。
- (5) 柿谷雄三氏には御所蔵の二本を閲覧させていただいた。絵のある本を仮に甲本、絵のない本を乙本と区別してみた。
- (6) 田中重太郎博士「絵と枕冊子絵巻と清少納言と」(『日本絵巻物全集・十二』(昭三六・一二)、のち『新修日本絵巻物全集・十三』(昭五一・九)にも)なお、後者には忍鑑についての注が論文の末尾に追記されている。国学院大学日本文化研究所編『和学者総覧』にも「忍鑑」は二人(四〇〇六・月照、七八二・忍鑑)でているが、没年(宝暦二年二月一七日)からみても、恵南(字)

・空華子(号)の方であらう。

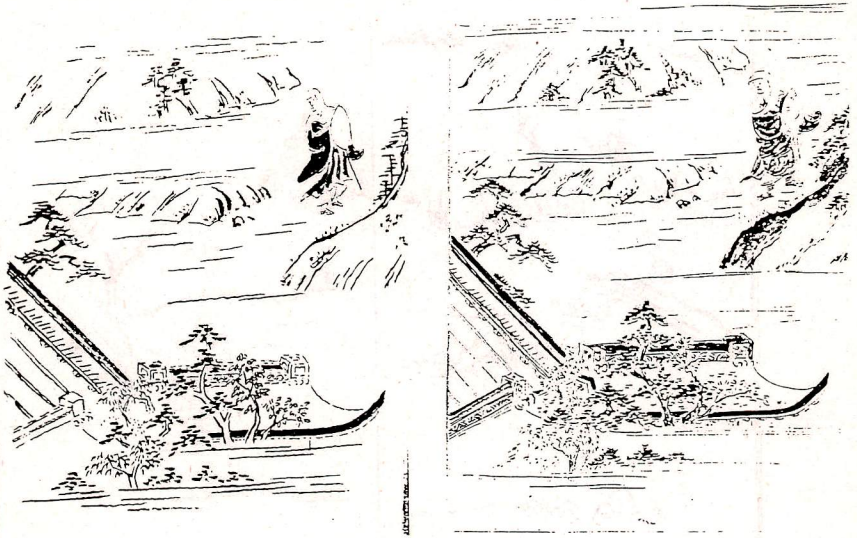
(7) 稻賀敬二氏「清少納言『松嶋日記』抄」(『鑑賞日本の古典 枕草子』所収)二八七頁

(8) (7)に同じ。二九〇頁

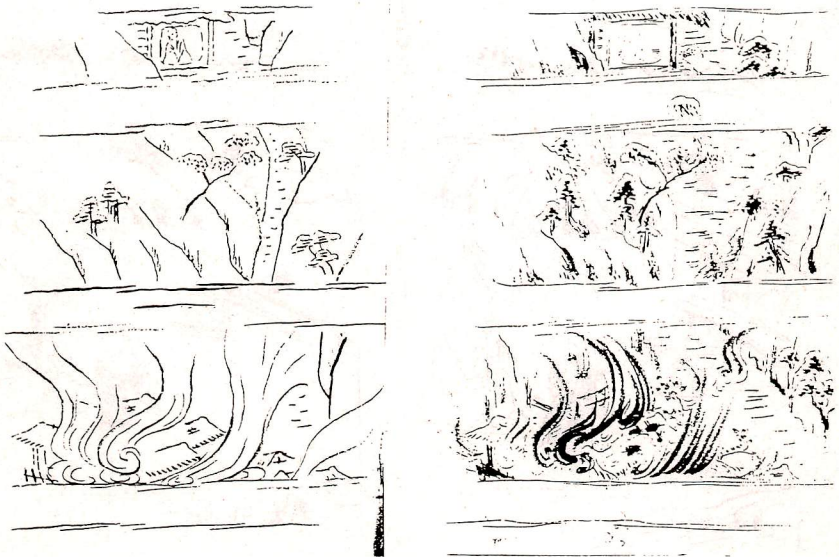
(9) (1)に同じ。第二十集による。

付記 本稿は「松嶋日記の研究」と題して、本文編(本文・校異・注記)、注釈編(本文)、考証編(奥書・絵・成立等)、鑑賞編の四部構成で執筆中の原稿の一部を切り出したものです。春曙文庫をはじめ多くの関係者の御協力に感謝申し上げます。貴重な御所蔵本を御協力下さった柿谷雄三氏、神宮文庫御当局、同文庫主事黒川典雄氏には格別の御高配をいただきましたことを記して、厚く御礼申し上げます。

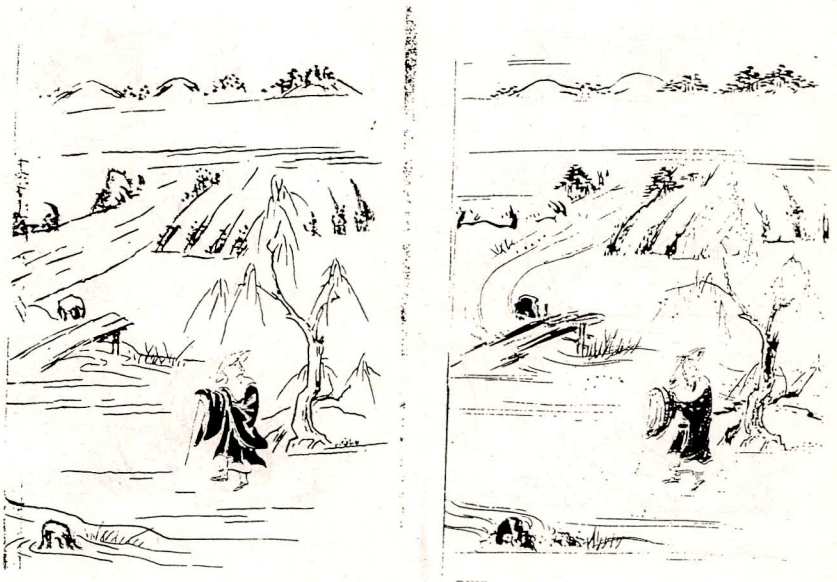
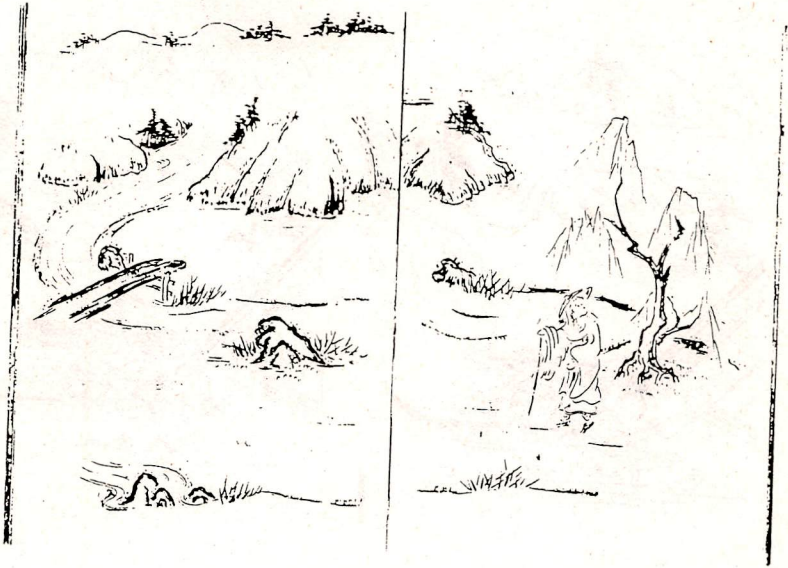
(なかにし・けんじ 相愛大学教授)



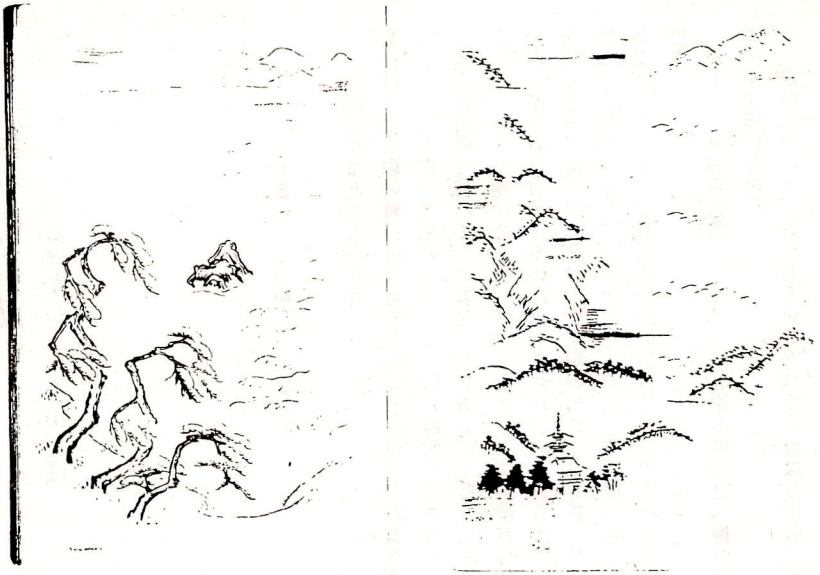
(図Ⅰ 右は柿谷甲本、左は東北大本。両本の類似性が注目される。)



(図Ⅱ 右は柿谷甲本、左は東北大本。両本の描写の粗密の差異は明らか。)



(図三 上は神宮文庫本、下は右が柿谷甲本、左が東北大本。神宮文庫本は八橋を八丁才に、雪折れの柳を七丁ウに分けて描いている。)



(図Ⅳ 神宮文庫本、左は七丁オ、右は三丁オ。)